

たみこの海パックが『伝える』想い

～ 地域の未来はきっと女性が握っている ～

たみこの海パック

代表 阿部 民子

1 地域の概要

私達の住む南三陸町戸倉地区は、宮城県の北東部に位置し、志津川湾に面している。志津川湾は、複雑に入り組んだリアス海岸特有の地形と竹島、椿島といった緑豊かな島々が風光明媚な景観を有しており、湾内では養殖業や漁船漁業が営まれている(図1)。

震災前 2,400 人いた戸倉地区の人口は、令和 4 年(2022 年)12 月末現在で 1,300 人程度まで減少した。

一方で、東日本大震災により被災した漁業関連施設は見事な復旧を遂げ、町の中心部には平成 29 年(2017 年)に「さんさん商店街」が、令和 4 年に「震災伝承館」がオープンしたことから、多くの人が訪れている。

また、南三陸町では平成 27 年(2015 年)に FSC 認証、翌年に ASC 認証を取得した。戸倉出張所カキ部会は、カキ養殖において国内で初めて ASC 認証を取得したが、その取組は高く評価され、令和元年(2019 年)には農林水産祭において天皇杯を受賞した。さらに、平成 30 年(2018 年)には志津川湾がラムサール条約湿地に登録された。同町内における FSC 認証、ASC 認証のダブル取得及びラムサール条約湿地登録は南三陸町が世界初であり、自然循環の大切さを広く発信している世界に誇れる町となった。

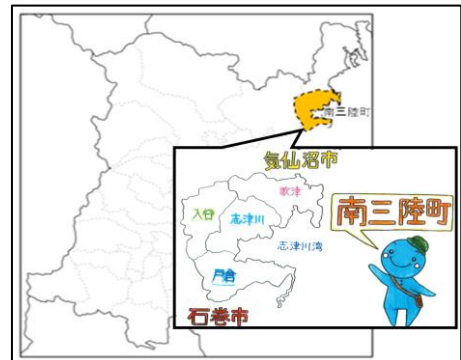


図1 戸倉地区の位置

2 漁業の概要

宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所には、令和 5 年(2023 年)1 月末現在で正・准組合員で合計 208 名の漁業者が所属しており、ギンザケ、マガキ、ワカメ等の養殖業、定置網、刺網等の漁船漁業、アワビ・ウニ等の採介藻漁業が営まれている。令和 5 年度の水揚げ金額は 20 億 5,100 万円でこのうち約 9 割を養殖業が占めており、品目別ではギンザケが最も多く、次いでマガキ、ワカメの順となっている(図2)。

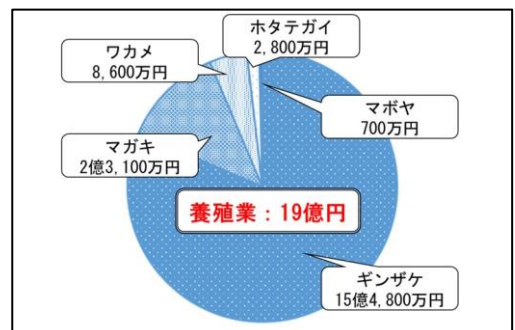


図2 令和5年度：戸倉出張所の養殖品目別の水揚げ金額

3 企業の組織と運営

平成 24 年（2012 年）10 月に「たみこの海パック」を立ち上げ、通信販売 WEB サイト「たみこの海パック」も開設し、通信販売を軸とした海産物の小売業を営んでいる。

夫と長男は主に養殖漁業に従事しており、我が家で水揚げしたマガキ、ワカメ、ウニ、アワビ等はたみこの海パックで販売している。

また町内の水産加工企業から私がセレクトした商品を詰め合わせセットとして販売しているほか、町のふるさと納税としての返礼品や企業のギフトとしても利用されている。

現在 4 名の女性スタッフを雇用している。

体験事業としては、漁業体験ツアー、海藻ふりかけワークショップを実施している。

4 実践活動の取組課題選定の動機

（1）東日本大震災による被災

平成 23 年（2011 年）3 月 11 日の東日本大震災発災当日、浜辺でワカメの芯抜き作業を行っていた時に猛烈な揺れの後、津波が襲ってきた。

大津波ではほぼ全てが流されたが、夫が沖出ししていた漁船 1 艘は被災せずに残った。それまでは美しく豊かな南三陸町の海が大好きだったが、震災以降は、とにかく海を見たくなかったし、船に乗れるような心境ではなかった。その後も強い余震が続く度に当時の恐怖がよみがえり、早く町から出たいとさえ思っていた。

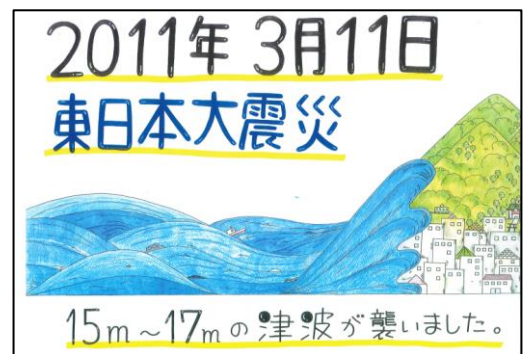


図 3 東日本大震災で全てが大きく変わってしまった

（2）通信販売の立ち上げを決意

それまでは家業で言われたことだけをやっているのが小さな幸せだと思っていた。

私は震災前の 15 年間程、お歳暮として親戚や友人に、自分のところで水揚げされたホタテガイ、マガキ、ワカメといった新鮮な海産物を送っていた（図 4）。

また、当時触り慣れていないワープロを使い、文字だけのレシピやお便りを入れていた。

お小遣い稼ぎ程度に冬期間のみ「海産物詰め合わせセット」のアナログ販売を細々で行っていた。10 年程が過ぎた頃からは関東方面からも注文が入るようになっていた。震災後の平成 23 年 7 月頃からは社会福祉協議会に入り、約 1 年間は仮設住宅の見回りの仕事に従事した。



図 4 たみこの海パックの原点

「何か海に関わる仕事をしなくては。でもとても海に出れるような気持ちにはなれない。」と悩んでいたところ、被災ボランティアの方から「昔やっていた経験を活かしてみたら？」と言われた。同じ頃、三男が内閣府の復興支援型地域社会雇用創造事業（「やっぺす！起業支援ファンド」）による補助があるとの話を聞いてきた。息子の

「おっかあ、できるんじゃないの？」の一言が当時の私の心に響いた。夫も「やれるようならやってみろ〜！」と優しく背中を押してくれ、3人の息子たちも「通信販売の立ち上げ」という当時の私の決断を心から応援してくれた。

ようやく「自分の居場所」が見つかったような気持ちだった。上手くいかなかったら元に戻ればいいやと開き直りの気持ちでまずは始めた（図5）。



図5 通信販売の立ち上げを決意

5 実践活動の状況及び成果

(1) たみこの海パック立ち上げ

起業支援は雇用創出のための支援だったため、建物や備品は購入できなかった。そのため事務所兼作業場とするためのプレハブは家族に内緒で貯めてあったへそくりで購入した。事業をスタートさせるのに必要な車、パソコン、冷凍庫等の備品は商工会議所に協力をもらい借金をして購入した。一切家のお金は使えないと思ったからである。平成24年（2012年）10月にプレハブが完成し、無我夢中でたみこの海パックをスタートさせた（図6）。

まずは経営の基礎について学ぶところからだったが、事業計画書の作成、補助金申請等、これまで縁遠かった作業の連続であった。

ボランティアで来ていた方からはパソコンの基本操作、WEBサイトの作成方法、SNS（Facebook等）による情報発信の方法を一から教わった。「通信販売をするならWEBサイトを立ち上げたほうが良い」とアドバイスもらったことから、起業支援勉強会への参加やその他のボランティアの方々にも教えてもらいながら、必死に事業を進めた。

震災後は、水産加工企業の再興が早かったため、4社の加工企業から商品を仕入れ、詰め合わせ販売を行った。町内で主に養殖ギンザケの加工販売を行っている加工企業に昔お世話になったことがあり、社長に近隣の加工企業を紹介してもらえないかとお願いした。次第に取引先が増えていき、今では、13社の企業と漁業者からも商品を仕入れられるようになった。取扱商品が増え、自分でも良いと思えるイチオシ加工品の詰め合わせセットをたみこの海



図6 たみこの海パック HP

パックとして販売できるようになった。

その後、養殖業ではワカメの生産が始まったことから、ワカメの袋詰めも行い、新たな販路開拓に奔走した。海藻類は県内外のスーパー、産直等で販売しており、志津川湾で水揚げされたヒジキ、フノリ等にはラムサール条約ロゴを貼付し、環境保全にも役立てている（図7）。

人との出会いに恵まれ、人に支えてもらって今の私がある。販売再開から約1年が経過した頃、海がどう再生していくのか、借金は返せるのか等の悩みで一人不安に押し潰され号泣する日々が続いた。

それでも頑張れたのはひとえに『家族の支え』と『人との繋がり』があったからと思っている（図8）。

（2）子育て世代の雇用

初めは甥っ子から子育て真っ只中のママを紹介された。「子供を連れてきても良いから働きに来てほしい！」とお願いしたところ、子供と一緒に出勤し頑張ってくれた。

また「仮設住宅を出て、働きたい！」と職場を探していたママや、県外から嫁入りしてきていた女性からも、「1時間でも良いから働かせてほしい」と声があり、雇用した。その他にも、子育て世代のママたちから「子供を学校に送り出した後、短時間でも仕事をしたい！」という声を聴くようになり、女性の雇用について意識するようになった（図9）。自分がかつてそうだったように、自分の時間を持ちたい、子供に合わせた時間で働きたいと感じる子育て世代のママたちが多かったのである。最近ではハローワークにも求人広告を出し、現在4名の女性スタッフを雇用している（写真1）。「短時間でも女性が生き生きと働ける職場作り！」をモットーに、スタッフには都合の良い時に来てもらうようにしている。



図7 ラムサール条約ロゴによる環境保全



図8 『家族の支え』と『人との繋がり』

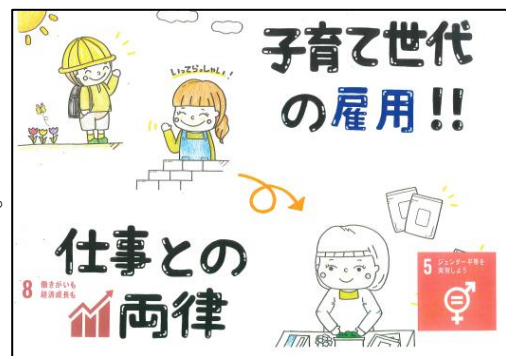


図9 子育て世代の雇用創出



写真1 商品の梱包作業を行う女性スタッフ

（３）認知度向上・販路拡大による販売促進

そんな中、女性として復興からの起業という点が珍しかったのか、マスコミからの取材が増えた。地道な営業活動、口コミ、マスコミ報道等により認知度も徐々に上がり、売上金額を伸ばすことができた。コロナ禍では通信販売ブームも相まってさらに売上は伸びた。

売上ピーク時の令和３年（２０２１年）には震災前平均の約５倍となる売上を達成した（図１０）。

県外のお客様や、移住して協力してくれる方さえいて、応援してくれる方が全国には大勢いるのだと心の励みになった。

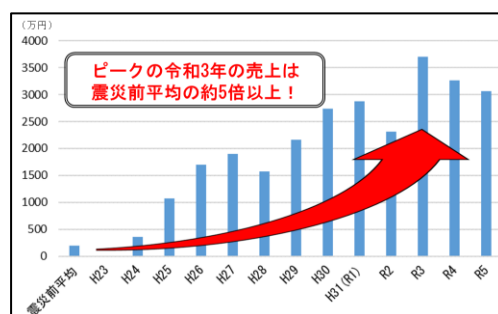


図 10 年間売上金額の推移

（４）漁業体験ツアー

震災で全てを失い、マイナスからの漁業を復興させた漁業者を目の当たりにしていたことから、その姿や取組、お店では伝わらないことやお金では買えない大切なことを消費者に伝えたいと感じ、『伝える役』になろうと決心した（図 11）。

ボランティアで来た人たちが知らない漁業のことを知ってもらうため、震災で残った漁船 1 艘を利用した「漁業体験ツアー」を平成 25 年（2013 年）から 2 年間無料で実施した（写真 2）。戸倉に実際に来てくれた方にマガキやマボヤの育つ様子を見せたり、話を聞いてもらうことで漁業者の想いや海を守ることの大切さが伝わり、感動してもらえた。

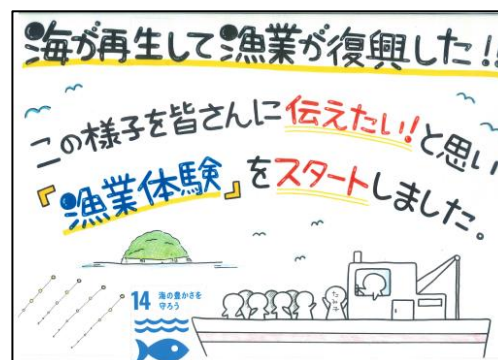


図 11 決心し『伝える役』に



写真 2 漁業体験ツアー

（５）海藻ふりかけワークショップ

海藻の規格外品を無駄にしないようにと考案したのが「海藻ふりかけワークショップ」である（写真 3、図 12）。



写真 3 海藻ふりかけワークショップ



図 12 英語版紙芝居

商品の原料である海藻類から出る規格外品はそれまで自家消費や廃棄していたが、勿体ないと感じたことから、フードコーディネーターに相談し、商品開発した。

ワークショップでは、まず町のこと、海藻のこと、海を守ることの大切さを紙芝居で学んでから、ふりかけ作りに入る。

細かくカットした海藻類を混ぜ、独自のタレを加えることでしっとりとした生タイプのふりかけが完成する。

天候に左右されず安定的に実施できることに加え、美味しく楽しく学べるプログラムとして学校教育や企業研修旅行等で人気となり、幅広く利用されたほか、海外からの参加者も増え、大変好評であった。

廃棄量も大幅に減り、収入へと変わった。

一方で、コロナ禍で一時的に参加者数が減少したことを受け、オンライン用に一人分の体験キットを開発した。キットを事前送付することで、オンラインで紙芝居からふりかけ作りまでできるようになった（図 13）。

その結果、ピーク時の令和 4 年（2022 年）にはコロナ禍初期の約 6 倍以上となる 675 人の方が参加した（図 14）。体験の最後には「コロナ禍が収束したら南三陸町に来てね！」と付け加えた。

6 波及効果

令和 4 年（2022 年）9 月、東北 6 県の企業・団体等による優れた SDGs に関する活動を表彰する大会として「第 1 回とうほく SDGs アワード 2022」が初開催され、たみこの海パックの取組が大賞を受賞した

（図 15）。大会の講評では、漁業体験、海藻ワークショップを通じて、志津川湾の素晴らしい環境や恵み、環境保全に向けた漁業者らの努力を発信したほか、雇用管理では、短時間勤務やシフトの融通性向上等により、子育て世代の就業機会の創出も図ったことが高く評価された。

大変名誉な賞の受賞を喜ぶと同時に、たとえ小さな事業所でも、これまでやってきたことは決して無駄でなかったと感じ、南三陸町の PR にも貢献できたことを嬉しく思った。



図 13 オンラインによる
海藻ふりかけワークショップ

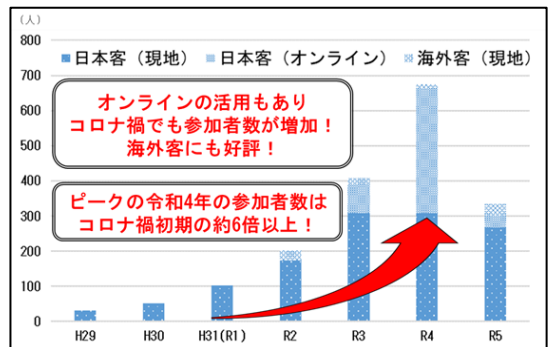


図 14 海藻ふりかけワークショップ
の参加者数推移



図 15 とうほく SDGs アワード大賞受賞

7 今後の課題と展開

近年続く海水温の上昇、漁業者の担い手や後継者不足、少子高齢化等、漁業を取り巻く環境は目まぐるしく変化しており、課題は山積している。まずは現実を受け止めること、これからも自分に出来ることを『続ける』ことが重要で、そして『続ける』ためには、『人との繋がり』が何より大切である。消費者の方々には海の状況だけでなく、1次産業や海産物を守り、食に繋げることの大切さを知ってもらいたい。そのためにもこれからも『伝える』ことを『続けて』いきたい（図16）。



図16 これからも『伝える』ことを『続けて』いきたい

また『自分の時間が持てること』は『人の豊かさ』であると思う。女性の雇用方法を見直し、改善したことで、それぞれが自分の時間を増やすことができた。私は皆に『働きやすく』、『楽しんで』、『やりがいがある』仕事をしてほしい。『小さな幸せ』を積み上げていければ、『大きな幸せ』に繋がる。

令和2年（2020年）には長男が一家4人で故郷に帰って来た。現在では、夫と共に漁業に励みつつ、たみこの海パックの業務も担当するなど、第二の人生を力強く生き生きと歩んでいる。

私は、若い後継者が生き生きと輝き、女性が生き生きと働くことができる『南三陸町の未来』を目指したい。『浜の活気』と『笑顔』は、必ず南三陸町を盛り上げてくれるはず。

そのためにこれからも私は伝え続けたい。

『地域の未来はきっと女性が握っている。』と信じて（写真4）。



写真4 『地域の未来はきっと女性が握っている。』